原告団

遺族・CO裁判、災害責任追及、特集号

第百七号

原告団レポート

遺族――岩谷フミ子さん

ツメ跡は深く大きい

つういにもぎとられたささやかなじあわせ

怒り押えボタンの穴かがり

悲運ながら

遺族・岩谷フミ子さんが、夫の義賢さんをあの三池大災害でうしなってから十四年になる。

住まいは、熊本県荒尾市緑ケ丘楓町の、三井鉱山の鉱員社宅の十棟。ひとり暮らしの毎日だ。

亡夫・義賢さんから託された子どもは、賢治さんという長男をかしらに四人。すでに成長を遂げ、母親フミ子さんの膝もとから離れそれぞれの道を歩いている。長男の賢治さんが神奈川県藤沢市で小学校の教諭。長女麗子さんは福山（広島県）の人と結ばれ、彼の地で暮らし、次女倫子さんは美容師の免許を得、熊本の某美容院で働き、末っ子の満さんは、藤沢で兄の賢治さんと住みながら、早くからの希望がかなって調理師の修業中である。

夫義賢さんの命がこつ然と消えていった大災害のとき、高校進学準備中だった中学三年の賢治さんをはじめ、長女の麗子さんが中学二年、次女倫子さんが小学三年、それに末っ子の満さんにいたってはまだ四つの幼児に過ぎなかった。それが、よくここまで成長してくれたものだ。

思えばあの日、夫義賢さんが行年四十九歳だったから、今生きていてくれたら六十三歳で、三十九歳だったフミ子さんがすでに五十三歳。何ごともなかったら、今頃はたとえ悠々自適とまではゆかなくても、人並みに定年退職後の二人暮らしの味も楽しめていたはずなのに。ひとり暮らしの身を鞭うちながら、同じ悲運に泣く遺族仲間とともに、そのために誘致された荒尾アソニットで今も働かなければならないとはつらい。

素裸同志が

フミ子さんが義賢さんと結婚したのは、昭和二十二年一月七日。義賢さんが三十二歳で、フミ子さんが二十二歳のときだった。

二人は、熊本県宇土郡三角町大田尾の義賢さんの実家で、形ばかりの式をあげた。

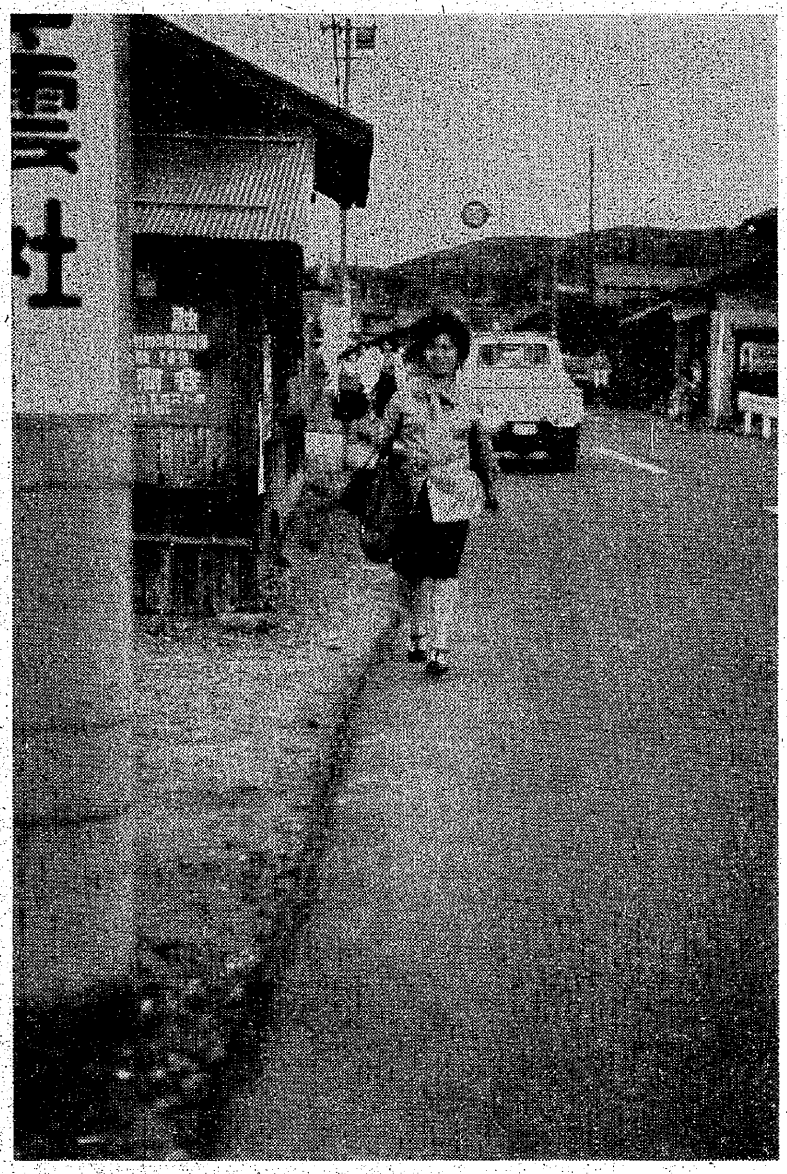
一家は、それまで佐世保の海軍工廠に働いていた父親浅吉さんとともに彼の地で暮らしていたが、太平洋戦争終戦と同時に浅吉さんが職を奪われたため前記の郷里へ引き揚げ、大田尾の海岸で塩たきをしながら露命をつないでいた。

義賢さんの方は、太平洋戦争に兵士として狩り出され、おもに南方戦線を転戦。ビルマで激戦を交えているさなか敗戦。からくも命拾いして帰ってきた身だった。

帰ってきたからといって、敗戦後の荒廃期にあったその頃の郷里などに仕事のあるはずがなく、やむなく人をたよって上京。小さな鉄工所で働いていた。

一方フミ子さんの一家は、これまた長く住んできた台湾から、亡夫義賢さんの家のごく近くの網田村赤瀬の郷里に引き揚げてきたばかりで、これまた苦しい日々をおくり迎えていたのであった。

文字通り素っ裸同志の結婚。特に夫の義賢さんにいたってはただ嫁もらいに帰ってきたばかりで、結婚式が終ったとたん、もうあたんが帰ってきたのは、結婚後一年近くたった頃のことだった。そこで初めて二人は結ばれたようなものだったが、新妻フミ子さんの東京転入の不可能なことがわかり、義賢さんはとうとう東京での結婚生活をあきらめざるを得なかったのである。



会社がやつとひけて仕事から解放され、帰りのバス停にいそぐ岩谷さん。

つらい生活

一家のうえに、ますます加わってきた窮迫。

結婚の翌年の二十三年が明けると、二人は逃げるようにして大牟田へ。人を頼り、義賢さんが三池炭鉱へはいって働くつもりからだった。かろうじて露路裏に荒屋をさがし当てて住むことそできたものの、かんじんの炭鉱入社の方は思うようにいかなかった。

苦しまぎれに、二人は打ち揃ってその日からドカチン仕事へ。米などの買えるはずはなく、毎日の昼食弁当はといえばだんご汁ときまっていたという。

それでいて毎日家に帰ると、彼女はこんどは疲れ切った体ながら近所の人から頼まれては和裁の夜なべだった。少女時代に手につけていたものが、どんだところで役立つことになったのである。

つらい新婚生活だった。「裸一貫で郷里に引き揚げて帰った者同志では、こうでもしなければ生きていけなかったんですよ」と述懐するが、なんとこのときフミ子さんはすでに五カ月の身重だったと聞いては、開いた口が塞がらぬ。

続く不幸

願いかなって義賢さんが三池炭鉱に入社できたのは、二十三年の五月のことだった。今は廃屋となって姿をさらしているが、職場は西原社宅に設けられていた三川鉱の第四寮で、炊事の仕事だった。昼ばかりの勤務だったのをさいわいに、勤務を終って家に帰ってくると、義賢さんはこんどはキャンデーを売り歩いて毎日稼いだ。

その年の七月十三日第一子の賢治さん誕生。翌二十四年の九月二十八日には、長女麗子さんが生まれた。一家はその年の十一月、やっと露路裏の荒屋を引き払うことができ、西原社宅へ。

その後、義賢さんは第四寮から三川鉱人事の守衛勤務となる。

ホッとひと息つけるかな、と思われたときのことである。重ねてきたかねての無理がたたってか、頼む義賢さんが突然の胸部疾患のため入院生活を余儀なくされる。

前後二カ年間にわたる療養生活の後、退院。家に帰ることそできたものの、まだまだ十分な療養を必要とする体に出勤など思いも寄らなかった。

ついに別居

さればといって、長く欠勤して義父の浅吉さんは、塩たきばかりでは暮らしが立たないと見てにわか漁師となり、小船で海へ出かけていっては、毎日ススキやボラ、キス、アラカブ、グチなどを釣って帰ってきた。

するとこんどは、なんと名ばかりの新妻のフミ子さんがそれを手に、馴れぬ足で行商へ。行商といっても戦後のこと、何も金に換えるのではなく、遠近の農村に出かけ、百姓家を一軒一軒まわっては、もっぱら米や味噌などと換えてもらうのが精いっぱいだったという。さぞかし悲しい思いだったことだろうが、とにもかくにも彼女の奇妙な新妻生活はこうしてはじまっていったのである。

そんな暮らしのなかに夫義賢さんきた義賢さんのもとには、も早や一文の給料も送ってはこなかった。悲しいことに、一家はなさけない生活保護家庭に転落。すべての夢が破れてしまった。

意を決したフミ子さん、西原社宅の家に夫義賢さんただ一人を残し、二人の幼な子をつれながら傷心の身を、郷里の実家の親もとへ。「実家に帰れば実の親がいるから、自分たちの暮らしは何とかなる。貧弱でも全家族分の生活補助で、せめて夫にその健康を十分取り返してほしい」、との精いっぱいの思いからだったことは述べるまでもないが、「どうか忘れずにきっと帰ってきてくれ」とすがる義賢さんと、二人で手をとり合いながら泣いたこのときの記憶は今もフミ子さんの心に深く刻印されていて消えることはない。

魚の行商へ

その顔をチラと見ただけで、もう翌る日からは頼る夫がいなくなった家での、フミ子さんの奇妙な新妻生活が始まる。

吹っ飛ぶ命

おかげで義賢さんは健康を回復することができ、三川鉱の自転車当番として勤務することになる。親もとに身を寄せていたフミ子さんは、二人の子どもをつれ再び待ちに待つ夫義賢さんのもとへ。

二十八年九月八日次女倫子さんが、三十四年三月五日に末っ子の満さんが誕生した。

義賢さんの胸部疾患再発。自宅療養中に三池闘争へ突入。

病身の義賢さんはホッパー決戦への参加など思いも寄らないことだった。その頃は西原社宅から現住所に移り住んでいたが、彼の任務はもっぱら地域闘争本部での電話当番だったとか。「あのとき、病欠ばかりしてきたうちの主人に首切り通告がこなかったことが不思議でなりません」、とフミ子さんはいうが。

闘争が終る頃には義賢さんも再び健康を回復。仲間とともに「団結・抵抗・統一」の三池労組員の信条を表す三本線入りのヘルメットを冠って就労。こんどは常一番の仕繰工だった。

家計を助けるために、小柄ながらも健康に恵まれた体のフミ子さん、こんどは生後幾ばくもたっていない赤ん坊の満さんを保育園にあずけながら、荒尾の一企業で働くようになる。「体こそ小さいですけど、おかげで私が強かったから助かりました」、とはフミ子さんの述懐であるが、その小さな体のどこからこのようながんばりが出てくるものか、驚くほかはない。

それでも結婚後十四、五年たって初めて、それまでまるで業（ごう）のようにつきまとって離れなかった不幸に泣き通してきたフミ子さんの前に、おぼろげながらもささやかなしあわせに通ずる一本の道が開けかけてきたことを、今や疑うことはできなかった。義賢さんの命があの大災害のために無残にも吹っ飛んだのは、ちょうどそんなときのことだったのだから非情だ。

ひとことを

今、アソニットで働き、専門のボタンの穴かがりのほか、本縫いボタンつけ、根まき、貫どめなども手がける。老後の身を思えば、たとえ低い賃金でも、腹立ちまぎれに仕事をやめるわけにもいかず過労に目をつぶりながらの出勤。

ときにはつきあげてくる、だれに向けようもない怒りが押さえ切れなくなり、仏前に座っては亡夫に向かってついこんな言葉をたたきつけてきたことも少くないという。

「これからだというのに、自分一人さっさと逝ってしまって。お父さんはなーんも考えんでよかばってん、こっちには四人も子どもを残してもらいました。これからどげんしてたべさせてゆけばよかつですか。ひとことでいいから、なんとかいって見てはどうですか」

天も怒れ。三井の保安サボがひき起こした大災害の爪跡は、余りにも深く大きい。